5月

田一枚　植て立ち去る　柳かな

心許なき日数重るまゝに、白河の関に

かゝりて旅心定りぬ。「いかで都へ」と、

一般　段級

【奥の細道】
西行法師ゆかりの遊行柳の下で座り込んで感慨にふけっていると、田植えをしているのが見える。田んぼ一面植えてしまうまでしみじみと眺めて立ち去るのだった。不安で落ち着かない日々を重ねるうちに、白河の関にさしかかって旅をするんだという心が決まった。(昔、平兼盛が白河の関を越えた感動を)「どうにかして都に(伝えたい)。」と

書道総研